学報 No.65

愛知県立芸術大学　学報

発行日　平成30年2月28日
発　行　愛知県立芸術大学
愛知県長久手市岩作三ケ峯1-114
TEL 0561-76-2851　FAX 0561-62-0083
http://www. aichi-fam-u. ac. jp/

学長退任記念インタビュー

愛知県立芸術大学学長 松村公嗣

松村 公嗣 まつむら・こうじ（本学学長）
1968年愛知県立芸術大学第3期生として入学。1972年美術学部日本画専攻卒業、1974年同大学院美術研究科修士課程を修了。専門は日本画。1983年より愛知県立芸術大学助手を経て、2000年より同教授を務める。2013年愛知県立芸術大学第9代学長に就任。

学長退任記念インタビュー 松村公嗣 学長

本学の第3期生であり、2013年より学長を務められた松村学長が今年3月をもってその責務を終えられ、退任されます。学生や教員時代の思い出、作品に対する思い、また学生へ望むことなどこれまでのさまざまなエピソードを織り交ぜながらお話いただきました。

（取材・文　小山芳恵）

絵を褒められたことが今の道へ進むきっかけのひとつに

――まずは幼い頃の松村先生についてお聞かせください。

あまり体が丈夫じゃなくて、よく学校を休んだりしましたね。図画工作の授業で得意な絵を描いて、いつも褒められるので、この頃から自分は絵が上手いのだと思い込んでしまいました（笑）。今でも覚えているのは、理科室の逆光の中で水道の蛇口から水が垂れる様子を写生して、それがとても印象的な絵に仕上がって、絵というものはこういうことを表現できるのだな、と感じたことです。

――その頃から感受性が豊かでいらっしゃったのですね。

そうですね。中学1年の美術の森先生が、私の絵をとても褒めてくれたことも思い出に残っています。森先生は私の絵をさまざまなコンクールに出品されて、たまに賞をいただきました。自覚のない賞でしたけれどね（笑）。こうしたことの積み重ねが今の道へ進むひとつのきっかけになったかもしれません。

2浪時代の不思議な出会いが日本画の原点

――本格的に絵画の道へ進もうと思われたのはいつ頃で、きっかけはどんなことですか？

高校は奈良の進学校へ進んだのですが、1年の秋に受けた模擬試験で先生に「国立大学は無理だな」といわれて（笑）。当時、大学情報を掲載した「蛍雪時代」という冊子があったのですが、体育系、芸術系を載せた「その他」というページで懸命に行ける大学を探しました。その中で芸術系大学の試験科目が少ない事を知り、デザインに興味があったことと、美術の成績が良かったこともあって「よし、京都美大へ行こう」と決めたのです。美術の先生に相談したら「2年は浪人するぞ」といわれました。その通りになりましたけれどね（笑）。

1972 S47.3
愛知県立芸術大学
美術学部 卒業

1974 S49.3
愛知県立芸術大学大学院
美術研究科 修了

松村公嗣 経歴
1972
2013

親は大反対でしたね。「美術学校など、出ても食っていけんぞ（笑）」と。「せめて教育大学へ行ってほしい」と懇願されました。でもどうしても美大へ行きたかった。「デザイン科だったら就職もいいから行かせてほしい」と頼み込み、浪人生活に突入したのです。そこで、京都美大の試験に強いと評判の京都の美術研究所に通うことにしたのです。授業料は高いのですが、京都美大は定員25人のうち20人がこの美研出身者といわれています。実技はもとより学科の勉強も頑張って、模擬試験は約70人中2番という好成績をとっていました。ですが、受験の時は学科試験ができなかったのです。もう失望のどん底でした。

――では愛知県立芸術大学をめざしたのは、その後なのでしょうか？

そうです。2浪してこれからどうしようかと落ち込む日々でした。ある日、植物園でふて寝していたら、目の前で老人が絵を描きだしたのです。まるで魔法のように絵ができていくのがおもしろくて、狸寝入りをしながら何時間もずっと見ていました。そしたら老人が「絵が好きなの？じゃあ私のカバン持ち代わりにスケッチについてこないか？」と声をかけられたのです。それからは毎週土日、自分も道具を揃えて老人と一緒に絵になりそうなおもしろい風景を求めて歩きました。名所はほとんど行きましたね。これが、私の日本画の原点になったのだと思います。

3回目の受験は、関西だけではなく愛知や東京の大学も受けました。そのうちのひとつが愛知県立芸術大学で、日本画専攻に受かったのです。実技試験は人物画でした。デッサンの練習もまともにやっていなかったのですが、老人とのスケッチ旅行のおかげできっと自然と技術が身についたのでしょうね。

片岡球子先生の厳しい教え

――大学での生活はどうでしたか？

入学試験の試験官が片岡球子先生だったのですが、入学してすぐに面接があって「松村さん。あなたビリで入学したんだよ。だから頑張りなさいよ」といわれて（笑）。その頃はまだデザインに未練があって、大学を抜けてデザイン学校に通おうかと思っていましたが、知らない間に4年過ぎましたね。

――片岡先生はどんな方でしたか？

片岡先生は長い間小学校の先生をされていたこともあって、大変厳しい方でした。1年生の最初の授業のことですが、先生が教室の扉をノックされながら「おはよう」と入ってこられた時、学生はみんな下を向いて「おはようございます」といったのです。先生は級長に「もう一度やり直します」と話され、次の時は級長が「起立、礼、着席」と号令をかけました。大学の授業では考えられませんよね。とにかく厳しかったです。それが大学での最初の洗礼でした。

片岡先生は手紙も「巻紙と筆で書きなさい」といわれました。おかげでいまだに手紙は巻紙で書くようにしています。余談ですが、かの織田信長も公の文書などは巻紙で書いています。紙に直筆で書くというのは大変説得力があるので、私は今でも学生にその魅力を伝えています。なかなかやらないですけれど（笑）。

――大学の雰囲気はどうでしたか？

私は昭和43年の入学だったので、まだ先輩も揃わず、校舎も少ない大学は、まさに未開の地でした。当時は校舎や奏楽堂を建築していましたから、アルバイトで建築も手伝って楽しい日々を過ごしていましたね。2～3年の頃は学生運動が始まって、ちょっと大学も荒れていました。油絵専攻の学生たちが自治会を作り、愛知芸大にも学生運動の波があっという間に押し寄せてきて大変な時代でした。

アルバイトといえば、今も思い出すのは学生課が紹介してくれた氷細工制作の仕事です。当時のナゴヤキャッスルで氷細工を作るアルバイトでとても待遇がよく、1本作ると当時のお金で1万円ほどいただけました。仕送りが月1万5000円でしたから、それはそれは大金でしたよ。日本画と彫刻の後輩と4人くらいでやっていたのですが、ちょうど中日ドラゴンズが連続で優勝した年で、対になったドラゴンの氷細工を20本ほど作って大儲けしたこともあります。「よし、卒業後はこれで会社を作って食べていこう」と思ったくらいです（笑）。

――楽しい学生生活を過ごされたのですね。進路はどのように決められたのでしょうか？

大学では教職も取って、卒業後は教

1974 S49
片岡球子に師事

1983 S58
愛知県立芸術大学
絵画専攻日本画助手

1994 H6
愛知県立芸術大学
日本画専攻助教授

師の仕事も決まっていました。しかしある先生から「松村さん、大学院へ行ったらどう?」といわれて、大学院へ進んだのです。大学院では院展のメンバーにも入って、制作活動に勤しみました。ちょうどその頃、オイルショックに見舞われてあらためて日本はエネルギーのない国だと知らされ、「これは、卒業しても絵では食べてはいけない」と思い、大学院を卒業してからは非常勤講師として母校に7年勤めました。

しかし、もともと絵で食べて行きたいと思っていましたから、少しずつ絵が売れ始めたのを境に愛知芸大を退職し、1年間、家で作家活動に取り組みました。それが34歳の時です。32歳の時にある画商が私の作品を気に入ってくれて、「絵で食べていける」という自信もプライドもありましたから、35歳で愛知芸大の助手の仕事の話をいただいたときも「給料はプラスα」と考えて引き受けました。今もそういう気持ちは変わらないですよ。

芸大の学生は「覚悟」が必要

――教員時代、どのような思いで学生に教えていらっしゃいましたか?また印象的なエピソードがあれば教えてください。

授業ではとにかく「絵とはこういうものだ」と自分の流儀を押し付けるタイプだったと思います。その代わりといってはなんですが、遊ぶのが大好きで、よく自宅で「カレーコンパ」を開いて学生を呼んで騒いでいました。私はカレーとお酒を用意して、学生は何か一品ずつ持ち寄るのが決まりです。カレーを作るのは今でも好きですね。香辛料は絵の具と同じで、いろいろ混ぜ合わせながら作るのは楽しいです。学生はスーパーの惣菜を買ってくる子もいれば、凝ったシチューを作ってくる女子学生もいてそれぞれでした。

とにかく私の家なら、強い酒を飲んでひっくり返っても雑魚寝して、翌日起きて帰ればいいわけですから、外で飲むより安心ですからね。

――楽しそうなコンパですね。

はい。他にも朝6時に自由参加で学生を車に乗せて、知立神社へ行って朝からスケッチをする、ということもよくしました。もちろん夜は我が家でカレーコンパです。遊びながら、学生にいろいろ教えるのは好きでした。

――学長になられてからは、学生にはどのような思いで接していらっしゃいましたか?

愛知芸大は他の大学とくらべて特殊な大学なので、生半可な気持ちでいてはいけない、卒業しても仕事の保証はない、右腕一本で食べていかなくてはならないと教えています。好きなことをやり続けると反比例してお金は入らない、その覚悟をまず決めなさい、とも伝えましたね。覚悟は口でいってもなかなか難しいものです。とにかく食うものを食わずに描いても何も保証がないのが美術の世界です。

――普通の大学の学生とは違いますね。

そうですね。私は京都美大に落ちて、合格した愛知芸大に行こうか、3浪したほうがいいか、デザインの専門学校に行ったほうがいいか美研の先生に相談したことがあります。先生は「愛知に行きなさい。美術の学校ならどこを出ても一緒だから」といわれました。それから50年、早いものですね。

また浪人時代に、7浪してデザイン学校に入り、企業の工業デザイナーになった先輩の話を聞いたことがあります。その先輩いわく「絵描きとデザイナーは違う。絵描きは作者が前に出るが、デザイナーはどんなすばらしいデザインをしても作者は後ろに隠れてしまう」と。先輩は1日200個ほどアイデアを出さなくてはならないから大変だとも話していました。その話を聞いて、「やっぱりデザイナーの仕事は大変だ、絵描きになろう」と思ったのです。お金になるかならないかはわかりませんが、とにかく自分の好きな仕事を自分のペースでやっていく。その覚悟を持つことが大切なのです。

時間を作ることと仕事を重ねることで絵と学長業を両立

――松村先生はお仕事と作家としての活動をうまく両立されています。学長の仕事と作品づくりの両立は大変でしょうか?

私の持論は「1日1枚は描けないが、1週間に7枚は描ける」です。私は1日に何枚も描き始めて、乾いた順番にまた描いて、という描き方をしています。仕事は重ねればなんとかできるものです。そのために自分で時間を作る工夫をしてきました。5年前に学長に就任して1年目は忙しく、文藝春秋の表紙の仕事しかできませんでしたが、2年目はスケジュールを調整して時間を作り、100点以上は描きました。

――お忙しい中、時間を作るのは大変なことです。

まさにその通りです。私の場合、以前は学校と家が近かったこともあって2~3時間空いたら一仕事しに家に戻ったりしていました。日本画は絵の具が3時間もあれば乾くので、描きやすいです。早朝に起きて描く、ということもしていますよ。子どもが成長して名古屋に家を建てた時はアトリエも作り、そこでずっと絵を描いています。以前は寝食を忘れて1日に25枚くらい描いていましたが、さすがに体にこたえるので今は10枚くらいにとどめています。

現場主義の作品づくり

――そのようにして仕上げる作品への思いをお聞かせください。

私は五感で感じたものを描くという、現場主義を大切にしています。学生のころ、研究会で「夏の下北半島の漁師の絵」を発表したことがあります。その時片岡先生に、「これはいつ描いたものか?」と聞かれ、「昨年の夏です」と答えました。すると「これじゃ何も伝わらない。今から路銀(旅費)をあげるから下北半島へ行ってきなさい」といわれたのです。先生のご自宅がある辻堂から名古屋へ戻り、上野へ行って夜行で下北半島へ行ったのですが、冬だったので人がおらず、潮風で雪もしょっぱい。水彩も凍ってスケッチもできない。何とか行って帰って片岡先生に電話すると「どうだった?」と聞かれました。「人がいなくて寒かった」と答えると「いいんだ、それで」と先生はいわれました。そこの空気の匂い、雪のしょっぱさ、潮騒の音など現場へ行って五感で汲み取ってそれを絵として表現しなさい、ということを教えられたのです。それ以来、私は取材に行くということを大切にしています。

今も文藝春秋の表紙を描いていますが、それも行ったことがない、見たことがない絵は描いたことがないです。

――取材のスケジュールはどのように立てるのですか?

計画して行く時もあれば無計画に行くこともある。どちらかというとあまり計画を立てずに「こんなおもしろいことがある」と感覚で取材に行くほうが好きですね。計画を立てても計画通りに行かないこともある。高校時代に友達3人で細かい計画を立てて旅行をしたことがありますが、ちょうど新潟で震災があった年だったので電車が遅れ、ルートや時間を余儀なく変更されたことがあります。3人で随分もめましたが、結局そこで知り合った漁師さんの家に泊めていただいたり、おいしいものをごちそうになってことのほか楽しかったんですよ。そのあたりから計画というのは無意味だなと思うようになりました。「行き当たりばったり」というのが私の座右の銘です(笑)。

長く描き続けることを大切にしてほしい

――それでは最後に、学長としてまた母校の先輩として、芸術家として、今の学生に望むことはどんなことでしょうか?

私はいつも卒業生に「傑作を書こうとせずに、とにかく長く続けなさい」といいます。1000枚描けば1点か2点くらいはいい作品が生まれるものです。私も今まで2500枚くらい作品を描いてきましたが、その中で自画自賛できるものは1点か2点あります。片岡先生も「絵は下手でもいいから続けなさい。続けていれば何かに出くわす」とおっしゃっていましたから、ぜひ根気よく作品作りを続けてほしいと思います。

――社会に出てからも作品を作り続けることは並大抵のことではないと思います。

そうですね。卒業してから3~5年でやる気が失せて食べられなくなって、ヤマ場を迎えることが多いでしょう。女性は結婚もあってここで筆を折る人も多い。でももう少し辛抱して頑張ってほしい。ここを過ぎればまた10年、20年目でヤマは来るかもしれませんが、頑張ってもらいたいと思います。天才と呼ばれる人はそんなにいないと思いますが、50、60歳まで描き続けることができればそれはひとつの才能です。ぜひ描き続けてほしいと思っています。

また今の若い人は現代美術に走りがちですが、まずは自分が生まれ育った日本全体の歴史を知ることが大切です。日本の美術はもともとオリジナルがなく、大陸から伝わってきたものであり、そこに日本独自の思考力が加わって創られてきたものです。日本の歴史や文化をしっかりと理解し、それに裏打ちされてできる作品こそが本当の創作だと私は思います。

――今後どのような作品を描いていきたいとお考えですか?

絵というものは、自分が得た感動から生まれるものです。今後も、これから先に出会う人やもの、事に対する自分の感性を大切にして作品を創り続けていきたいと思っています。

1998 H10

日本美術院賞(大観賞)
受賞「なおい」
日本美術院 招待 推挙
日本美術院 同人 推挙

2000 H12
愛知県立芸術大学
日本画専攻教授

2004 H16

日本美術院再興第89回展
文部科学大臣賞受賞
「ベナレス」

2007 H19
日本美術院再興第92回展
内閣総理大臣賞受賞
「はだか祭」

2012 H24
日本美術院　理事

2013 H25

愛知県立芸術大学
第9代学長就任

news

学生・卒業生の昨年の主なニュース

期間:平成28年11月から平成30年1月まで

美術学部/美術研究科

専攻	氏名	学年・卒年	展覧会・コンクール名	受賞名
油画 版画	鶴田 功生	博前 2年	第 12 回 CBC 翔け！ 二十歳の記憶展	名古屋市教育委員会賞
	鶴田 功生	博前 2年	Fresh2016 鶴田功生展 / 伊勢現代美術館	採択（入選）
	鶴田 功生	博前 2年	亀山トリエンナーレ / 亀山市内（三重）	入選
	鶴田 功生	博前 2年	第 7 回山本鼎版画大賞展	入選
	中野 優	博前 2年	WONDER SEED 2017	入選
	今木 彩瑛	博前 1年	第 42 回全国大学版画展	優秀賞
	今木 彩瑛	博前 1年	町田市立国際版画美術館 作品収蔵	
	今木 彩瑛	博前 1年	日本版画協会第 85 回版画展	入選
	今木 彩瑛	博前 1年	第 7 回山本鼎版画大賞展	入選
	浅沼 香織	博前 1年	第 42 回全国大学版画展	優秀賞
	浅沼 香織	博前 1年	町田市立国際版画美術館 作品収蔵	
	浅沼 香織	博前 1年	第 7 回山本鼎版画大賞展	入選
	阿部 大介 鷹野 健	2004 修了 2005 修了	VOCA 展 2018 現代美術の展望	採択（入選）
	前川 祐一郎	2009 修了	VOCA 展 2018 現代美術の展望	採択（入選）
	横山 奈美	2012 修了	日産アートアワード 2017	オーディエンス賞
油画	河村 るみ	2007 修了	名古屋市美術館 常設企画展 ポジション 2017	採用 河村るみ 個展 「介－生と死のあいだ」
	河村 るみ	2007 修了	美濃加茂市民ミュージアム 現代美術レジデンスプログラム	採用　河村るみ When I am laid in earth －私が大地に横たわるとき－
	河村 るみ	2007 修了	ゲンビどこでも企画公募 2017	入選
	秋良 美有	学部 4年	国際瀧富士美術賞	受賞
	野田 千晴	学部 4年	第 7 回山本鼎版画大賞展	入選
彫刻	児玉 佑司	博前 2年	第 12 回 CBC 翔け！ 二十歳の記憶展	準グランプリ
	宮城 歩夢	学部 2年	第 6 回あさごアートコンペティション 2017	スポンサー賞 但陽信用金庫賞
芸術学	小田川 祐希	学部 3年	ファン・デ・ナゴヤ美術展 2019	採択（2019 年企画展開催）
デザイン	中山 泰徳	2017 修了	JID AWARD 2017	NEXTAGE 賞
	木島 卓哉	学部 4年	日東工業株式会社設立 70 周年ロゴコンテスト	最優秀作品
	河野 楓	学部 4年	日東工業株式会社設立 70 周年ロゴコンテスト	優秀作品
	陳 穎龍	博前 2年	日東工業株式会社設立 70 周年ロゴコンテスト	入選
	杉浦 なるみ	学部 4年	日東工業株式会社設立 70 周年ロゴコンテスト	入選
	藤原 琴美	学部 4年	日東工業株式会社設立 70 周年ロゴコンテスト	入選
	曽我部 花実	学部 3年	日東工業株式会社設立 70 周年ロゴコンテスト	入選
	安藤 蒼空	学部 3年	超小型 EV「コムス」ラッピングデザイン	トヨタ自動車株式会社デザイン採用
	西堀 菜々子	学部 2年	超小型 EV「コムス」ラッピングデザイン	豊田市デザイン採用
	竹内 さつき	学部 3年	JAGDA 学生グランプリ 2017	大黒大悟賞
	夏目 茉美	学部 1年	痴漢防止バッジデザインコンテスト 2017	審査員特別賞 （たか子賞）
	野田 里咲子	学部 1年	鶏 1(ケイワン) グランプリ ポスターデザインコンテスト	最優秀賞
陶磁	宮下 陽	博前 2年	第 48 回東海伝統工芸展 （平成 29 年）	入選
	滝本 汐里	博前 1年	第 12 回 CBC 翔け！ 二十歳の記憶展	審査員特別賞
	滝本 汐里	博前 1年	第 6 回そば猪口アート公募展	特別賞
	明石 竜太郎	2000 修了	第 6 回そば猪口アート公募展	入選
	明石 朋美	2015 修了	第 6 回そば猪口アート公募展	入選
	兪 期天	2015 修了	第 48 回東海伝統工芸展 （平成 29 年）	名古屋市教育委員会賞
	兪 期天	2015 修了	第 64 回日本伝統工芸展 （平成 29 年）	入選
	兪 期天	2015 修了	第 7 回菊池ビエンナーレ	入選
	冨田 まりこ	学部 3年	第 57 回日本クラフト展	入選

音楽学部/音楽研究科

専攻	氏名	学年・卒年	展覧会・コンクール名	受賞名
作曲	丹羽 菜月	博前 2年	第 34 回現音作曲新人賞	第 34 回現音作曲新人賞
	岡田 智則	博前 1年	PRESQUE RIAN Prize2017	入選
	岡田 智則	博前 1年	CCMC2018 Contemporary Computer Music Concert2018	入選
	可知 奈尾子	1990 修了	第 9 回 JFC 作曲賞コンクール	入選
	倉地 佑奈	学部 4年	The Young Composers Competition 2017	ファイナリスト
	倉地 佑奈	学部 4年	第 3 回 モーリス・ラヴェル国際作曲コンクール	セミ・ファイナリスト
	坂田 直樹	2007 卒業	武満徹作曲賞 2017	第 1 位
声楽	小林 奏	博前 2年	第 71 回全日本学生音楽コンクール 北海道大会	声楽部門大学の部第 1 位、全国大会出場
	舟倉 悠利	博前 2年	第 9 回 東京国際声楽コンクール	歌曲部門 第 2 位（最高位）
	川田 真由	博前 1年	第 18 回 大阪国際音楽コンクール	声楽部門 Age-U の部 オペラコース本選 エスポワール賞
	川田 真由	博前 1年	第 71 回 全日本学生音楽コンクール 名古屋大会	声楽部門大学の部 第 2 位
	原田 奈於	博前 1年	第 9 回 東京国際声楽コンクール	新進声楽家部門 第 5 位
	宇多村 仁美	2012 修了	文化庁委託事業〈平成 29 年度 次代の文化を創造する新進芸術家育成事業〉 新進演奏家育成プロジェクト オーケストラ・シリーズ　第 39 回名古屋	合格（声楽）、 名古屋フィルハーモニー交響楽団と共演
	宇多村 仁美	2012 修了	第 47 回 イタリア声楽コンコルソ	ロイヤルティガー国際部門金賞
	船越 亜弥	2012 修了	第 18 回 大阪国際音楽コンクール	声楽部門 Age-G の部オペラコース本選第 2 位（最高位）
	井口 侑奏	2016 修了	新国立劇場オペラ研修所 第 21 期選考試験	合格
	田浦 彩夏	2016 修了	文化庁委託事業〈平成 29 年度 次代の文化を創造する新進芸術家育成事業〉 新進演奏家育成プロジェクト オーケストラ・シリーズ　第 41 回 福岡	合格、九州交響楽団と共演
	小林 美咲	2017 修了	第 70 回全日本学生音楽 コンクール全国大会	声楽部門大学の部 第 2 位
	千賀 さゆり	学部 4年	第 25 回 名古屋演奏家育成塾コンサート	奨励賞、名古屋市長賞
	戸ヶ里 優衣	学部 4年	第 26 回 名古屋演奏家育成塾コンサート	奨励賞
	杉内 亜有美	学部 2年	第 71 回 全日本学生音楽コンクール 名古屋大会	声楽部門大学の部 第 3 位
	田邊 実優	学部 1年	第 71 回 全日本学生音楽コンクール 名古屋大会	声楽部門大学の部 第 3 位
	竹多 倫子	2006 卒業	五島記念文化賞	オペラ新人賞
ピアノ	猪子 杏奈	博前 2年	International Nice Côte d'Azur Piano Competition	ディプロマ部門（23 歳以下）第 2 位 グランプリ部門（31 歳以下）第 2 位
	小笠原 歩里	博前 2年	第 27 回日本クラシック音楽コンクール	ピアノ部門大学女子の部 第 3 位
	西田 百花	博前 2年	第 27 回日本クラシック音楽コンクール	ピアノ部門大学女子の部 第 3 位
	大槻 匠	学部 4年	第 4 回 東京国際ピアノコンクール	第 2 位（1 位該当なし）
	近藤 聡美	学部 4年	第 4 回なごや青少年ピアノコンクール	大学・大学院の部 第 1 位及び総合 1 位　愛知県知事賞
	近藤 聡美	学部 4年	第 27 回日本クラシック音楽コンクール	ピアノ部門大学女子の部　第 3 位
	寺腰 千紗	学部 4年	第 26 回 みえ音楽コンクール	ピアノ大学・一般の部門　第 1 位
	寺腰 千紗	学部 4年	第 8 回 ヨーロッパ国際コンクール	ピアノ大学・一般の部 金賞・グランプリ
	眞鍋 杏梨	学部 4年	第 32 回全日本ジュニアクラシック 音楽コンクール 全国大会	第 3 位 （第 2 位該当なし）
弦楽器	清水 綾	2017 修了	中部フィルハーモニー	オーディション合格（ヴァイオリン）
	今川 結	学部 4年	第 19 回 日本演奏家コンクール	弦楽部門特別賞 （ヴァイオリン）
	大木 悠起子	学部 3年	アジアジュニアユースオーケストラ 2017	オーディション合格・ワールドツアー参加（ヴァイオリン）
	才加志 美優	学部 3年	第11回 セシリア国際音楽コンクール	第 3 位（ヴァイオリン）
	長谷部 りさ	学部 3年	第4回 いかるが音楽コンクール	プロフェッショナル部門・音大生・院生部門第 2 位（ヴァイオリン）
	長谷部 りさ	学部 3年	第 26 回 日本クラシックコンクール	全国大会　大学の部第 3 位 （第 1 位該当なし）（ヴァイオリン）
	野口 真由	学部 3年	第 19 回 日本演奏家コンクール	弦楽器部門第 3 位（ヴィオラ）
	神田 穂南	学部 2年	第 26 回 みえ音楽コンクール	大学・一般の部第 2 位（ヴィオラ）
管打	森岡 日向野	学部 4年	文化庁委託事業〈平成 29 年度 次代の文化を創造する新進芸術家育成事業〉 新進演奏家育成プロジェクト オーケストラ・シリーズ　第 39 回名古屋	合格（フルート）、名古屋フィルハーモニー交響楽団と共演
	浦畑 尚吾	学部 4年	第 29 回 宝塚ベガ音楽コンクール	入選（クラリネット）
	小阪 怜佳	学部 3年	アジアユースオーケストラ 2017	オーディション合格（オーボエ） ワールドツアー参加
	内園 満帆	学部 2年	第4回 刈谷国際音楽コンクール	優秀賞（フルート）
	林 まり恵	学部 2年	ヤングクラリネッティストコンクール	第 3 位　奨励賞
	岡本 りおな	学部 2年	小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト XVI　オーケストラメンバーオーディション	オーディション合格 （トランペット）
	八木 健史	1998 卒業	セントラル愛知交響楽団	オーディション合格（ホルン）
	森田 和敬	2005 卒業	フィンランド放送交響楽団	ソロ・ティンパニスト オーデション合格
	神谷 紘実	2007 卒業	2017年 第 34 回日本管打楽器コンクール	マリンバ部門優勝、文部科学省大臣賞、東京都知事賞
	小助川 大河	2008 卒業	東京佼成ウインドオーケストラ	オーディション合格（ホルン）
	鈴木 一成	2009 卒業	第 29 回 宝塚ベガ音楽コンクール	第 1 位及び兵庫県知事賞（ファゴット）
	世良 法之	2017 卒業	小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト XVI　オーケストラメンバーオーディション	オーディション合格 （フルート）

topics

注目のトピックス

松村学長エピソード

美術学部長
白木 彰
しらき・あきら

松村学長、設楽学生支援センター長と私は同時期に本学に着任した。松村先生は3期生、設楽先生は9期生、私は10期生でみなさん先輩だが、着任が同期であることから気さくにお付き合いをしていただいた。着任当時は三人とも助手という下積みの時代で、助手仲間が集まる助手会では、日々の苦労話や本学の将来をみんなで熱く語っていた。また、三人とも本学の敷地内にある教員住宅（芸大村）に住み、子育てをしながらの家族付き合いで楽しい時期でもあった。

着任早々の夕刻、「玄関にどこかのおばあちゃんが来てるよ。」と家内が私を呼びに来た。誰かと思えば、日本画客員教授の片岡球子先生が立っていた。突然の巨匠の来訪に、恐縮しながら対応すると、片岡先生は立派な袱紗を私に差し出し、「この子（松村先生）が先生（白木）や奥様にお世話になります。」と丁寧にあいさつされた。小さな片岡先生の後ろには大きな松村先生がスーツ姿で立っていた。頭をぺこぺこ下げ困った顔をしている松村先生は、今の学長からは想像できない。片岡先生は松村先生を連れて芸大村の住宅を一軒一軒まわり、新任のあいさつをされていた。松村先生を連れての挨拶回りに、村の奥さんたちは大騒ぎで、「松村先生のお母さんかと思った。」とか「この袱紗いくらくらいになるのかしら?」とか、下世話な話に花が咲いていたのを覚えている。

芸大村には小さな公園があり、設楽先生だと思うが着任記念の植樹と称して三本の細い桜の苗木を植樹してくれた。村の奥さんたちは、三本の桜に松村桜、設楽桜、白木桜と命名し、「どの桜の花がきれいに咲くかしら?」と談笑をしていた。その当時、芸大村には名物教授がたくさん住んでいらっしゃって、酒に酔うと、「お前らの桜に俺の肥やしをやっておいたからな!」と豪語されていた。ありがたいような困った話である。そのお陰か2年か3年後、白木桜が最初に枯れた。そして設楽桜は大きくなったが、私は花が咲いたところを見たことがない。しかし、松村桜は立派な太い木に成長し、毎年春、美しい花を咲かせている。

副学長
戸山 俊樹
とやま・としき

松村先生は、ご自分を根っからの絵描きと考え、まさか大学を運営する立場になるなどとは露ほども想像しておられなかったのではないでしょうか。しかしながら、創立期の愛知芸大で学ばれ、その後ずっとこの大学で教鞭を執られてきた先生が愛知芸大出身初の学長になられたことは、創立50周年という大きな節目を迎えた大学にとって大変喜ばしい出来事だったと思います。

世の中は今どこも評価、評価の時代でまるで息が詰まりそうですが、緊迫した一種独特の雰囲気の大学評価会議等にあっても、外部委員からの質問に対する先生の答弁は、いつも秀逸でした。「これはご質問とは少し違ったお話かも知れませんが」と前置きし、本当に質問内容とは違ったお話をされ始め、話し終えられた時には質問した委員を始め、その場の誰もが一体何についての質問や答弁であったかを忘れてしまうのです。まさに煙に巻くという場面に私は何度も遭遇しましたが、あれは話術か催眠術か…余人に出来ることではありません。

今後は健康に留意され、先生の衰えを知らぬ創作意欲をもってますますご活躍される事を願って止みません。5年間、本当にお疲れ様でした。

大学院美術研究科
博士後期課程（日本画）
川島 優
かわしま・ゆう

この度は、松村先生の学長御退任とのことで私がこの場をお借りして言葉を残せることに大変恐縮しております。

先生には私が愛知芸大学部1年生の頃から指導教員としてお世話になりました。当時は、私の容姿から「金髪のサッカー少年」と呼ばれておりましたが、制作を通じて独自の世界観にのめり込む傾向から「君は変態です。だから狭い枠組みにとらわれることなく、自由に描きなさい」と言って頂けた言葉が、現在の自身の原動力となっています。また具体的なご指導とは違った形で、先生の積み上げられた人生観と美学を通じ、絵を描くことで成長していく前向きな意志を情熱的にご指導頂けたのだと実感しております。

最後になりますが、先生の御退任と共に自身も修了できることを誠に光栄に、誇りに思います。松村先生、長きにわたる大学勤務と学長のお勤め、本当にお疲れ様でした。

「組み合わせ」が生むモノの新たな姿を発見したい

美術学部デザイン専攻3年
中島 幸希 なかしま・こうき

『積乱』という作品は、アトリエに落ちていた綿棒が始まりでした。

綿棒を使った作品はよく見かけますが、よく使用される素材だからこそ、そこには何かヒントがあるのだろうと感じました。大学の課題である「浮遊する空間のデザイン展」へ出展するため、綿棒を曲げることによってできる、雲のようなふわっとした空間を展開していくことにしました。地道に、少しずつ変化を加えていく。地味ですが、完成に近づくにつれて想像していたものの精度がより高くなっていくことを実感します。はじめは均等に並べていた綿棒ですが、大きくなるにつれて疎密の空間を作り出し、より雲らしい形にしました。この作品には結果的に6,000本の綿棒を使いました。

私は制作の中で、素材を重ねることでできる、組み合い方や組み合う形状に魅力を感じ大切にしています。家にある家電を分解し、他の家電と組み合わせることが幼少期の私の遊びだったそうです。幼いころから「組み合わせる」ということが面白くて、今の制作にも繋がっていることを思うと、そんな息子を見守り許してくれた母に感謝しています。

選ぶ素材自体は身近なモノ、自分の生活範囲にあるモノが多いです。落ちている物や何気ない影など、そういうところに作品としての可能性を感じます。愛知県立芸術大学は、光、自然、有機物に富んでいて、自分の制作フィールドにはもってこいです。大学の森の中や校舎と、使おうとしている素材が、自分の想像している作品にぴったりあてはまります。手を動かしていく中で、身近なモノがこんな姿になるのか、こんな空間を生み出すのかということに気づかせてくれます。

「浮遊する空間のデザイン展」に出品した『積乱』が評価され、2017年9月にユニクロ名古屋店（JRゲートタワー内）にて行われたヒートテックサンプリングキャンペーンで作品展示するオファーをいただきました。それに伴い、新たに『mimi』という作品を作成しました。綿棒を少しずらして重ねていきその組をさらに何度も重ねると、螺旋を描く塊ができました。これを見つけたときの感動は忘れられません。この作品では、前回よりも多い10,000本以上の綿棒を使いました。

緻密な物を作ることはもとから好きですが、その緻密さが見る人に熱意や情熱を伝えると思っています。自分の想像力が見る人、広くは社会に、驚きや影響を与えたい。これが私の喜びです。私は現在デザイン専攻環境領域に所属しているので、こういったアート系作品以外にも、空間作品や住宅・公園をデザインすることも行っています。自分の想像力を社会にフィットさせ役立てられるよう日々を過ごしています。社会の構造と自身の想像を組み合わせ、美しい創造になると考えています。

mimi

積乱

愛知芸大で見つけた“好き”を形に

大学院音楽研究科博士前期課程 作曲領域2年
丹羽 菜月 にわ・なつき

愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻を首席で卒業、桑原賞受賞。同大学院博士前期課程2 年在学中に渡仏。
現在、ブローニュ＝ビヤンクール地方音楽院在学中。
作曲を小井洋明、久留智之、小林純生、Jean-Luc Hervé 、電子音楽をYan Maresz の各氏に師事。
第34 回現音作曲新人賞受賞(南聡審査員長)。
2014 年度公益財団法人青山財団奨学生。

私は愛知県立芸術大学大学院博士前期課程を休学し、2016年秋からフランスのブローニュ=ビヤンクール地方音楽院で作曲の勉強をしています。愛知芸大時代は、本当にのびのびとやらせてもらっていました。そして良くも悪くもマイペースだった私に辛抱強く付き合い、この先もずっと作曲を続けていけるように長い目で育ててくれた師匠と出会えたことが、何よりも幸運でした。

自分が何をどう表現したいのか、かつ表現は強烈に!といった音楽と向き合う姿勢を教わった日本とは一転、フランスでは技術的な事や方法論を主に学んでいます。フランスのレッスンでは、常に説明することを求められます。語学の面はもちろんですが、それまで割と感覚的に曲を書いていた私はとても苦労しました。自分の作品における曖昧な部分を整理しクリアにしていく作業をしていく中で良い意味で自分と音の間に距離感が生じました。これは、パリの先端の電子音楽の技術に触れていたことも強く関わっていると思います。そして生活面ではフランスの手続きやルールに慣れ、こういうものだと割り切れるようになるまでにとても時間がかかりました。

そうして1年目が終わる頃に挑戦したコンクールで、第34回現音作曲新人賞を受賞させていただきました。このコンクールは若手作曲家の登竜門の一つとして知られており、長い目で見た公平性という主旨のもと審査員長は再選されず、毎年与えられるテーマや楽器編成は異なります。作品発表の機会が少ない私は多くの人の耳に触れる機会を得たいという一心で挑戦しました。そしてこの経験を機に、少しだけ肩の力が抜け、音楽に対する考え方にも自然と変化が生まれ、今また新鮮な気持ちで留学2年目を送っています。

私は大学院2年生の時に留学したので、他専攻の学生と比べると年齢的に少し遅い方ですが、自分にとっては本当に最適なタイミングだったと思います。日本で築いた土台を一旦崩し、再構築するのは抵抗もあり、とても勇気のいることでしたが、愛知芸大で見つけた自分の“好き”の根本は揺るぐことなく、むしろ別の角度から探求する視点を持つことでより濃くなっています。毎日自分が外国人であるということを当たり前に自覚させられる海外生活の中で、日本人である自分が今後どういうスタンスで作品を書いていくのか、そろそろ考え始めなくてはいけないと思っています。自分なりの答えをこれからじっくり時間をかけて探していきます。

1 前列中央・丹羽菜月さん（提供：日本現代音楽協会）
2 現音作曲新人賞授賞式の様子
3 留学中の様子

topics
トピックス

愛知県立芸術大学オペラ公演

2017年度の本学大学オペラは、プンパーディンクの名作《ヘンゼルとグレーテル》を公演しました。公演は本学が所在する長久手市だけでなく、知立市でも行われ、尾張、西三河地方の小さなお子様をはじめ多くのお客様にご来場頂きました。また、知立市の公演は文化庁の平成29年度「劇場・音楽堂等活性化事業」の一環として、近隣の学校生徒に向けてゲネラルプローベ（総練習）を公開しました。

本学では3度目となる《ヘングレ》、大学院美術研究科の「プロジェクト研究」（舞台美術）の学生と教員が舞台美術デザインを担当。ヘンゼルやグレーテルたちをネズミに、魔女をネコに設定、それに沿った舞台美術デザインがなされました。大学院音楽研究科の「オペラ総合演習」の教員による指揮、演出や音楽指導、履修学生によるキャストとしての演唱や稽古ピアニストとしての働き、本学学生からなる管弦楽団、合唱団、助演らの多くの力が結集し、公演は大成功をおさめました。

アーティスト・イン・レジデンス

1 ミニョノー氏・ソムラー氏 ワークショップ
2 梅山氏 アーティスト・トーク
3 シュヴァイカー氏 公開レッスン
4 大坪氏 シンポジウム

2017年度のアーティスト・イン・レジデンスでは、次の5名のアーティストを招聘しました。

美術分野ではロラン・ミニョノー氏、クリスタ・ソムラー氏（メディアアーティスト・リンツ美術工芸大学教授、12月）を、音楽分野では梅山秀一氏（コルペティトゥール・インディアナ大学准教授、7月）、ハンス・クリスティアン＝シュヴァイカー氏（チェロ奏者・ケルン音楽大学教授、11月）を海外から招聘しました。また、今年度は初めてレジデンスアーティストの公募を行いました。多数の応募があり、その中から大坪晶氏（写真家・現代美術作家、9月～翌年2月）を招聘しました。

ワークショップや公開レッスン等のプログラムは、多様な文化や芸術に触れる機会となりました。教員や学生と交流を深めることにより、研究・教育の場としての成熟に繋がりました。

message
新任教員紹介

作曲専攻作曲コース
成本 理香 なりもと・りか

大きな不安とほんの少しのプライドを持って入学式のために芸大坂を上ったのは今から約30年前の春のことです。まさか将来、そこが自分の職場になるなど思いもせずに。そして昨年春、あの頃とはまた違った不安と喜びとを持って再び芸大坂を上りました。今度は新任教員として。

学士、修士、博士の全ての学位をここで取得した生粋の愛知芸大育ちです。昨年春までの20年以上のフリーランス生活の中で、世界のどこに行っても「私が勉強したのは愛知芸大です」と誇りを持って自己紹介して来ました。私は学生達に、私がそうであるように、ここで勉強したことを誇りに思えるような学生生活を送ってもらいたいと思い、そのために試行錯誤の日々です。

作曲家としては、ある社会学者の言葉である「オリジナリティは情報の真空地帯には発生しない」を信条として活動してきました。学生たちにも好奇心を持って他のジャンルの文化にもどんどん触れてほしいと思っています。そして、学生たちと共に私自身も日々成長していきたいと思います。

器楽専攻管打楽器コース（トランペット）
杉木 峯夫 すぎき・みねお

本年度4月より管打楽器コース特任教授に就任しました。

私は、1970年東京藝術大学を卒業し、フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院で学んだ後、国立リヨン管弦楽団、札幌交響楽団を経て、1986年から2012年まで、26年間東京藝術大学で教鞭を執りました。演奏活動として、ベルナール・トマ室内管弦楽団、コンセール・コロンヌ管弦楽団、水戸室内管弦楽団、紀尾井シンフォニエッタ東京、サイトウ・キネン・オーケストラ等に参加、その他、モーリス・アンドレ国際コンクール、ナルボンヌ金管五重奏国際コンクール、ルーアン国際コンクールの審査員に招待されています。

教養教育（社会学・英語）
中根 多恵 なかね・たえ

教養教育の社会学と英語を担当しています。学生時代はオーケストラに所属し、毎日バイオリンの練習に明け暮れていた私にとって、本学は昔から遠い憧憬の、特別な存在でした。憧れの本学に奉職し、創造的な時間と空間に身を置きながら教育・研究活動に専念できることに、日々このうえない幸せを感じております。

私の研究関心は、〈孤立しがちな人びと〉の集合行為にあります。人びとがより自由に、流動的に、個人的に生きるようになり、組織の力が弱体化した現代社会において、異なるライフスタイル、生活様式、価値意識をもつ人びとがいかにつながり、ひとりひとりの抱える〈個人的なこと〉がいかに社会を動かしうるのか、という問いを探求しています。

本学学生は、創造性を追求する過程で自身と向き合う個人的な時間を過ごす機会が多いと思います。〈個人的なこと〉という社会学的発想をヒントに、自身が抱える身のまわりの小さなことがらをていねいに洞察し、社会的に解決するスキルを習得してほしいと願っています。

本学では学生オーケストラ、室内楽、大学院特殊研究、大学院博士後期課程の授業を担当しています。選抜試験で選び抜かれた才能あふれる学生達と充実した日々を送っています。更に、優れた教育環境の中から世界に大きく羽ばたいてくれることを願っています。

国際交流事業の活動報告

■ウズベキスタン国立美術工芸大学

デザイン・柴崎教授を中心とする研究拠点形成事業「現代に生きる〝手漉き紙〟と芸術表現の研究～サマルカンド紙の復興を中心に」のキックオフセミナーが平成29年6月26日に本学で開催されました。共同研究を行っているウズベキスタン国立美術工芸大学からアミノフハッサン学長をはじめとする研究者が参加し、セミナーでは今後の研究について活発な議論が交わされました。その後11月にはウズベキスタンにて、古いコーランやミニアチュールの調査を行い、本年2月には研究交流セミナーを開催しました。3年間の1年目である本事業は、ウズベキスタン文化の研究振興を目指し、今後も幅広く調査研究を行えるよう研究基盤の充実に注力しています。

■メキシコ国立自治大学

平成29年9月2日から10日まで白木美術学部長をはじめとする美術学部の教員（版画・倉地教授、日本画・岡田教授、油画・白河准教授）がメキシコ国立自治大学を訪問してワークショップや講座を開催しました。平成28年6月に愛知県立大学・田中敬一教授を介してメキシコ国立大学美術学部長をはじめとする2名の教員が本学を訪れ、今後の交流について協議を開始し、研究教育の最初の交流として平成29年9月の事業が企画されました。ワークショップと講座は盛況のうちに終了し、同大学とは同年12月に学術交流協定を締結しました。

■モンゴル国立芸術大学

平成29年9月25日に本学の音楽学部とモンゴル国立芸術大学音楽学部が学術交流協定を締結しました。本協定は平成28年12月に同大学の教授陣がNPO法人日本モンゴル文化協会（久野昭治 理事長）とともに本学を訪問されたことをきっかけに協議が始まり、松村学長をはじめとする両学部の教員（日本画・北田教授、ピアノ・鈴木准教授）がモンゴルを訪問し、締結に至りました。協定締結の翌日には音楽学部・鈴木准教授が同大学のコンサートホールでピアノを披露し、交流がスタートしました。

■ミャンマー視察

平成29年12月22日から28日まで本法人・鮎京理事長と松村学長、神田教授（彫刻）、阪野准教授（日本画）がミャンマーを訪問しました。初日には芸術文化の発展に理解のある、矢橋ホールディングス株式会社様のヤンゴン支店を訪問し、現地法人の活動やミャンマーの市民文化についてお話を伺いました。マンダレー文化博物館では、石器時代から始まる歴史的遺物等に関する説明を受け、また、古式の金箔の製造工程の見学のためキング・ガロン金箔工房を訪れました。バガン考古学博物館では、収蔵品や文化財保護活動等に関する説明を受けるとともに、伝統ある寺院から研究資料を収集し、ヤンゴン大学内に設置の名古屋大学・ミャンマー事務所訪問では、学内視察や情報交換などで親交を深めました。

1

2

3

4

1 キックオフセミナー（ウズベキスタン）
2 ワークショップ（メキシコ）
3 協定締結（モンゴル）
4 視察訪問（ミャンマー）

藤田保健衛生大学と協定を締結

平成29年11月8日本学と藤田保健衛生大学は学術研究の発展と有為な人材育成を共に目指すことを目的に包括連携協定を締結しました。本学が実施する病院アウトリーチプロジェクトの院内コンサートを同大学の病院で実施するなど連携事業が展開されています。なお、この病院アウトリーチコンサートには、株式会社東海メディカルプロダクツ会長 筒井宣政様、陽子様ご夫妻から支援をいただいております。